猫又と俺　2

青蛙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
猫又と俺　２

【Ｎコード】
Ｎ８６０８Ｗ

【作者名】
青蛙

【あらすじ】
ちょっとヘタレの高校生の家に居座った俺様な妖怪猫又とのちょっぴり怖い高校生活。
「猫又と俺」ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ１６３１ｖ／の続きの話になります。

下痢便君、高校へ行く

おれの名前は丘野　孝之。所詮、負け組の高校一年生だ。
何に負けたのかと言うと、言いたきゃないが受験戦争ってやつ。
見事にこの春、第一志望の高校に落ちてしまったというわけ。
「あんたって子はここ一番でヘタレるんだから」
落ちたって分かった途端の母親の第一声がこれだ。
まあ、おれもいろいろ言いたいことはある。　が、一番は受験当日腹こわしたのは母親の言う「腹巻しなかった」からじゃなくて、前の晩ご飯のせいだかんな。
試験の前日、塾から夜遅く帰ってきたおれはテーブルの上にあった煮物を食った。
そりゃ食うだろう？　ラップしてたし、塾から帰ってきたら毎度腹をすかしているんだから。
まさか、いつの残り物か分からなくなって始末する予定で冷蔵庫から出していたなんて思わねえだろ。
ましてや、処分するのをすっかり忘れて子どもが塾から帰る前に寝込んでしまったなんて知るわけない。
ほんとに試験どころじゃなかったんだよ、おれは。
だが、なんとか泣きたいのをぐっと堪えて部屋に帰ったおれを打ちのめしたのは次の言葉だった。
「孝之、下痢して運も一緒に便所に流したのかよ、前から思ってたけどおまえって器用だよな」
ただでさえ落ち込んでるおれに一体なんの恨みがあるのか知らんが冷たいのは世間じゃなく家だ。
――ここはシベリアかよ。涙も凍るぜ。
そしておれに酷いことを言ってきたのは本来人を癒してくれるはずのおれのペットの黒猫……つうか実はこいつ、猫なんかじゃない。
いや、だったら犬？　とかそんなオチじゃなくて。　こいつは二

股という尻尾が二つある化け猫だ。要するに妖怪でおっかない上に口が悪い。
夏に祖母ちゃん家で拾ったっていうか、もー取り憑かれちゃったっていうのか、とにかくずうずうしくもおれの家に居座っている。
「うるせーよ、猫又。猫に受験が分かってたまるか」
「分かんねえな、だが腐ったもんも分からず食っちまうほどおまえが賤(いや)しいってのは分かる」
くそっ。　ちょっとすっぱいかな……とは思っていたんだよ、おれだって。
「滑り止めとかいう変な名前の学校行くんだろ？　んじゃいいじゃねえか。そんな不景気な顔しないで、とっとと『カリカリ君』持って来い」
「あのな、『滑り止め』ってのは学校の名前じゃないぞ」
「分った、分かった、下痢便君、カリカリ君持って来いって」
ちくしょーっ、なんだか自分が何に対して怒っていたのか分からなくなる。　とりあえずこれは言っておく。
「今は下痢してねえからな」
はいはいと猫又は前足を舐めながら尻を振った。

しょげてた割に、おれは結構学校生活を楽しんでいた。　みんながこぞって「行く行く」言ってた学校を志望していたが、どこかいいかなんて分かってなかった。
落ちて悔しかったのは本当だったけど、それは試験に受からなかったということに対してだけで、学校自体にそんなに執着があったわけじゃない。
「大学は落ちないでよ」

学校始まった途端に母親に言われたことも――今は忘れてやる。
おれの行く白鷺学園は幼稚舎から大学まであるマンモス校だ。
大学は別にキャンパスがあるのでここには無いが、今おれとつるんでいるのは幼稚園児からこの学校だという筋金入りのお坊ちゃんと、おれと同じ併願で入ってきたやつだ。
「おい、丘野知ってるか？」
「何？」
いきなり質問されても答えようも無い。　おれは学食の『天使のちくわ天入りきつねうどん』をずるずると啜った。
「Eクラスの安部由香里っているだろ」
すっきりとサイドを刈りこんだスポ魂マンガの主人公みたいな林啓太が『ときめきA定食』を頬張りながらおれを見る。　ちなみにもう一つの定食は『ドキドキB定食』という。
――Eクラス？　って英語ばっかしやって短期留学しまくってる通称『ブルジョワクラス』の……？　あべ　ゆかり……？
「知らん」
「知らないの、孝チン」
そうツッコンできたのはお坊ちゃんの田口　聡というサラサラヘアの女の子受けする草食系男子で昼飯時なのに『お花畑プリン』を上品に口に入れていた。
「それより前から思ってたんだけど、何でここの学食のメニューは言いにくいもんばっかりなんだ？」
「だよな、おれ『オチャッピーラーメン』って言いにくいよ」
おれに相づちを打って、林がとんかつの最後の一切れを名残惜しそうに飲み込む。
「それって今年からだ。うちって去年まで男子校だったじゃん。男女共学になるっていうんで学食もイメージアップ狙ったんだって」
プリンの横のバニラアイスが溶けかかってるのに構わずプリンばっかり口に入れながら田口がメニューの謎をあっさりと解いた。
「溶けてる」

「何？」
「アイス、先に食えよっ」
おれの指摘にああと田口が半分溶けかかったアイスにスプーンを入れた。
「で、何話してたっけ、おれら？」
「安部　由香里だよ、Ｅクラスの」
――ああ、そうだっけ。
「あいつさ、呪いをかけるらしい」
――は？
「呪いって？」
おれの問いに林はちょっと待てというように片手を突き出し、定食についている豆腐の味噌汁をごくごく飲んだ。
今日の定食は味噌トンカツ……ってイメージアップしてるのか、これ？
食った食ったと腹を押える定番の仕草の後で林が田口が残したバニラアイスのなれの果てをずずっと啜る。
「おげっ、何やってんだよ、林」
「勿体ないじゃん。それよりその安部　由香里だよ。あいつ霊能力があるんだってさ。呪って欲しいやつは安部に貢物して頼むらしい」
「ば……ばかばかしい、そんなのあるわけないよ。っていうか気色……悪いよね」
田口はやや青くなって視線を落した。　いるわけないことも無いけどさとおれは心の中でこっそり呟く。
去年の夏におれは仏さんの大行列も見たし、悪霊も見た。　おまけに家には妖怪までいるのでそういうオカルトがまったく無いとも思わない。
思わないからこそ、それの真偽なんて知りたくない。　そういうのとは関わりたくない。　だが、得てして逃げたい時に限って逃げられないものなのだ。

俺さまの出番

「面白そうだろ、丘野」
「いや全然」
「えええ～」
えええじゃねえよ。そういうのには近寄らないのが一番なんだよ。ブルジョア女子、霊感どっちを取っても手に負える気がしない。
「確かめに行こうぜ」なんて言うと思うか、バカタレ。
立ち上がったおれに林はちぇっとわざと大きなため息をついて見せて、田口の肩に手を置いた。
「おまえは興味あるよな、田口」
「そ……んな……」
「孝チン、助けて」
林に引きずられるように田口は学食を出て行った。　ごくろうなこったとおれは二人に向けて手を振った。
助けてって……？　まったく田口ったらおれよりヘタレなんだから。　でも今日はいつものヘタレに磨きがかかってなかったか？
いくら草食系とはいえ、高校男子がお昼にプリン一個で足りるんだろうか？　それにああ見えて怪談話とか前はノリノリだったような？
身体の調子が悪かったのか？
聞いてやろうかと思ったのに、午後になって林はともかく田口までおれを避けていた。　なんだよ、おれが話に乗らなかったのがそんなに腹が立ったのか？
「ちぇっ、こっちからは絶対話しかけてやんねえ」
面白くない気分だったが、別にその後も何があることもなく、おれは家路についた。
「ただいま」
「よ、帰ったか、孝之。なんか背中が痒いんだよなぁ。ってことで

背中掻いてくれ」
足元でじゃれつきながら猫又がからんでくる。
――ああ、声が聞こえなかったら普通なのに。
飼い主が帰ってきて単純に喜んで出迎えてる飼い猫の図……なのに。惜しい。
「何が惜しいんだよ」
声に出ていたらしい。
「何でもないって」
部屋に入ると後ろにいたはずの猫又がぴょんとベッドに飛び乗った。
「孝之、ほれほれ」
二本の尻尾が手招くみたいにゆらゆら揺れる。　仕方ねえなあと呟きながらおれは猫又の背中をがしがし掻いてやる。　するとほんとの猫みたいにごろごろと喉を鳴らした。
「結構可愛いな、おまえ」
「へっ、今頃気づきやがったのか。そんなんだから高校生にもなるのに彼女の一つもできないんだよ」
さっきの訂正だ。やっぱりまったく可愛くない。
「孝之、おまえ何ひっ付けてる？」
今まで伏せしてた猫又が起き上がって厳しい声を出す。
「何……って、何？」
猫又が何を言ってるのか分からず、おれは近寄ってくる猫又の前で固まった。　胸ポケットに猫又の前足がかかる。
「中見て見ろ、孝之」
慌ててポケットを探ると中から折った紙が出てきた。　一体いつの間にこんなものを入れられていたのか。
五角形に折られた白い紙をラグの上に置くと猫又が軽い身のこなしでベッドから飛び下りた。　それに触れないようにしながら匂いを嗅いで「ふん」と鼻を鳴らす。
「孝之、手を直に触れずにそれを開いてみろ」

ど、どうやって？　えっとゴム手袋するとか？　どうしようかと考えていたら「このアホたれ、さっさとしろ」と手を引っ掻かれてしまった。
「痛いって」
「そりゃ痛いわ。むしろ痛くなきゃいかん。いつも鋭く爪を磨いでるんだからな」
ったく、暴力妖怪め。　それと、カーテンで爪研ぐのを止めろ。
ふと思い出して、机の引き出しからピンセットを取り出して苦労して折った紙を開いた。
「気色悪っ、なんだよこれ」
中には黒くて長い髪が何本か丸めて入れてあった。　紙の内側は赤黒い字でなんか書いてあるが乾く前に折ったせいなのか擦れて読めない。
「これは髪だな」
「んなことは分かってるんだよ、妖怪」
はあ？　と猫又がやくざかと思うようなメンチを切る。　猫が斜めに顔を上げてガンつける風景……世も末だ。
「こいつはおまえを呪ってるんだよ。てめえ、女を泣かせた……わけないな」
「何、一人で納得してんだよ。まあ、泣かせたことなんて無いけどさ」
一体誰なんだ。おれ知らずに女の子泣かせた？　そんな甲斐性が無いことは自分が一番知ってる。
そこに携帯の着メロが鳴っておれはびっくりして飛び上がりそうになった。　いや実際何センチかは浮いていたかもしれない。
それは田口からだった。
「孝チン、だ、だ、だ……」
「田口、おまえ言葉が道路工事みたいになってるぞ。どうしたんだよ」
思いもかけず沈黙が降りる。　これってどうしたらいいのか。

言いにくいことがあるのかもしれないと思いつく。
「孝チン……」
「田口、話があるから電話してきたんだよな」
なるべく刺激しないように穏やかな口調でそっと語りかける。
昼間のことを謝りたいのかもだし。
「……ん……」
「あの……ごめん孝チン」
やっぱり謝罪の電話？　それだけだと思うのにやたら喉が渇いて仕方ない。　嫌な予感がする。　なんかヤバイことに巻きこまれてしまったんじゃないか、おれ。
「あ……あのさ」
「うん？」
やばい、やばい、やばい。　もう聞きたいのか、聞きたくないのか分からなくなっていた。
足元から震えが来るなんてあの夏以来だ。　きっととんでもないことを田口は言うに決まっている。
「林が、安部　由香里の嘘を暴いてやるって。孝チンを呪いの対象にしたんだ」
「なんだって？」
――やっぱり。
だったら自分にしろよ、林っ。　なんでおれの名前なんか……。
昼間その話をした時にはもう依頼済みだったというわけかよ。
どさくさに紛れて胸ポケットにあんなもん入れやがって。
「孝之、おまえ、友達に恵まれてるじゃないか」
がっくりと肩を落として携帯を切ったおれに、猫又が髭を前足で触れながら笑った。
「林ってやつにその呪い女の連絡先を聞け」
「なんで？」
「俺さまの出番だからな」
そう言った猫又の姿が同じ歳くらいの女の子になる。　初めて会

ったときもこの姿だった。　花柄のワンピースに肩までの黒髪、つり上がった二重の大きな目がニヤリと歪んだ。
「この美少女妖怪、猫又さまに任せろっ」
「すっげー楽しそうだな、おまえ」
ええ？　心配してんだぜと猫又は不敵に笑った。

バカップルな二人

大き目のカップに注がれた甘いラテにはミルクを使ったアートがバリスタによって描かれていた。
「クマだ、クマ。そっちは何だ？」
「ウサギだって」
一人で入るには無茶苦茶勇気を試される所におれはいた。　まあ、一人じゃない、猫又と一緒だ。　一応女子の格好してるせいで店に普通に入れた気はする。
ファンシーな雑貨に囲まれたカフェなんて男子だけじゃ絶対入れない。　なんで安部　由香里はこんなとこで呪う相手と待ち合わせする気になったのか？
意味わかんねえ。
「熱っ、火傷するじゃないかっ。まあ、このチーズの菓子は上手いな」
「なあ、どう思う？」
「やっぱ、チーズは裏切らんよなぁ……」
「おい、猫又っ」
何か言ったか？　と顔を向ける猫又はこの状況を存分に楽しんでいる。　だけど手づかみで食うな、手づかみで。
「待ち合わせしてるやつのことだよ。本当に呪いができるかってさ」
「おまえのその平たいやつ、上手そうだな。ちょっとくれ」
「え、やだよ。だいたいケーキセットが千五百円って高くないか？　モックなら三人分食えるのに」
つまり、待ち合わせしてるだけでおれは三千円取られるってことだ。　腹が減ってて思わずセットにしたけどコーヒー単品にすれば良かったと今は大後悔していた。
「でも、俺さまは楽しいぞ」
「おれは呪われてんだ、楽しめるか」

「俺さまは呪われてない」
なんてやつだ。　もう絶対『カリカリ君』なんて買ってやるかっ。
安もんのキャットフードにしてやる。　んなことを考えて手が止まったのを見逃すわけもなく、横から猫又がメープルシロップがかかったパンケーキを奪い去る。
「おい、こらっ、返せ、泥棒猫っ」
やだねと言いながら両手でパンケーキを持った猫又がわしわしと豪快に口に入れていくさまは家での『グルメササミ』を食べてる様子と重なって滅茶苦茶猫っぽかった。　ふいに周りの席の客の視線が気になる。
「おまえ、見られてるっ。そんな食い方すんな」
「俺さまは可愛いからな」
じゃなくて、野生動物みたいな食い方するなっちゅうんじゃ。
「手を舐めんのやめろ」
ん？　何で？　そんな感じで手についたシロップをべろべろ舐めてる猫又の手首を掴むとおしぼりでごしごしふいてやる。
「そっちの手も貸せ」
ついでに口の周りについたクリームもおれのおしぼりで拭いてほっとしたのもつかの間、周りの視線が熱い。
やっていたことを反芻して顔が赤くなる。いやもうなんかバカップル全開なマネだった。　家で猫又の世話してる気持ちになってたが、今こいつは人型だった。
――ったく、公衆の面前でなにやってんの、おれ。
「丘野君だよね、その子誰？」
振ってきた声に顔を上げると、髪を背中まで伸ばした清楚な感じの女の子がおれたちを見下ろしていた。
お互いに制服で会うことにしていたので、この娘が安部　由香里なんだろう。
「それでこっちの子は誰なの？」
おれより猫又が気になるのか？　どうせおれは影が薄いよ。　不

貞腐れ気味に横に目をやる。
「俺さまは孝之の仲良しのお友達だ。そんなことより、一体何をこいつの家に引き入れようとした？」
猫又の言葉に安部　由香里はぎくりと体を震わせた。
「今のどういうこと？」
おれの問いに心底めんどくさそうに猫又は頭を振った。
「呪いをかけるのにどうして自分の髪を呪符に包む必要がある？こいつが呪っているんじゃない。背後にいるのはたぶん妖（あやかし）だな。
妖怪は自分だけでは家には入れない。家主の承諾や、あらかじめ自分の一部を先に家の中に入れる必要がある」
そうなのか？
「お化けってどこにでも入れるもんだと思ってた」
おれの言葉にちっと猫又が舌打ちする。
「玄関ってのは、建物の主要な出入口だが、吉凶の出入りするところでもある。中国の道教では体内に気を通す最初の場所って意味だ。禅では『玄妙の道に入る関』ってことになってる」
玄関ってそんな意味があるとは。　靴脱ぐとこかと思ってたとはとても口にできない。
「あ、あたしは……」
そわそわと安部　由香里が落ち着かなくなっていた。
「これ、返す」
つーっと五角形に畳まれた紙を人差し指で彼女の方へ滑らせると見る間に顔が蒼白になる。
「なあ知ってるか？　呪いってのは破れると術者に反ってくるんだぜ」
猫又がぺろりと口の端を舐めた。
「助けて」
ふんと猫又が顎を上げる。
「だったらきりきり喋らんかいっ」

観念したように安部　由香里は喋り出した。　黙ってなくていいとほっとしたのか、やたらと喋る。
要約すると、ブルジョアなクラスに入ったものの、阿部由香里の家はそんなに裕福でもないらしい。　おれから言わせれば短期留学を繰り返すようなクラスに入れるほどなら金持ちだよと思う。
だが、阿部由香里によると持ってるもんが全然違うらしい。　財布だけで十万近くするような物をとっかえひっかえ持っているらしい。
行きつけの美容院はカリスマ（死語か、これ？）美容師のいる所で、カットだけで二万近いんだと。　高校生のくせしてエステだのネイルだのに通っているそうだ。
それのどれもがおれには全然うらやましくないが安部　由香里にとっては大問題だったらしい。
初めはそのクラスの女の子を呪うつもりだったが、夜中に行った神社近くの森の中ですっごいイケメンと会ったことで意味合いが違って来た――そうだ。
夜中に突然現れたすごいイケメン……あまりにも胡散臭い。　そいつが言うには自分には力があるので由香里ちゃんの手助けをしたいそうな。
「え、それ信じたの？」
思わず聞いてしまうくらい嘘くさい話もイケメンなら許される。
その理不尽さにおれは怒りさえ覚えた。

おやつは三百円まで

この亀はブレイクしますよ。　オーナー制っていうことで世話する手間なんてかかりません。　一年で二割は固いですよ～なんていうインチキ商法くらい嘘くさい話。

だいたいこの現代で丑の刻参りする女子高生ってどうよ……。

「だから呪いの依頼を受けることにしたの」

あっと言う間に趣旨変えした彼女は、しっかりと報酬も受け取ることにした。　ブランド物の鞄やピアスや服。　中には十万渡してきた生徒もいるという。

聞いているうちに気分が悪くなってくる。

親が必死で働いた金をこうやってお宅のお嬢さんたちはどぶに捨てるみたいに使っているんだよと、今すぐ電話したい。

依頼先から相手の髪や触ったものなんかを貰って、イケメンに渡す。　すると次の日には怪我したとか病気になったとかで生徒は学校を休む。

初めに少しは感じていた罪悪感も消えて、今はビジネスライクに請け負っていたらしい。

「だって呪うって言ってもちょっとした怪我とか病気になるだけだもん」

そう言って安部　由香里はオレンジジュースをごくりと飲んだ。

それだけ……自分には不相応の格好や持ち物と引き換えに人に危害を加えておいて、彼女は実にあっけらかんとしていた。

手を汚してないから？　自分はただの仲介者だと思っているから？　やっぱり本当に怖いのは人間だとおれは思った。

「助けんの止めない？　おれなんだか気が乗らない」

いっぺん怪我すりゃいいんだ。　気に入らないとかいう理由で呪われた人たちの痛みを知ればいい。

おれはくさくさした気分で席を立った。

「そんな……わたしを見殺しにするの？」
「うるせーっ。今までさんざん人にやってきたくせに」
ところが、そのまま立ち去ろうとするおれのズボンをがしりと猫又の手が掴んだ。
「なんだよ」
「怪我だけではすまん。それでもいいのか。夢見が悪いぞ」
怪我だけじゃない？
「今回はおまえの髪を使っていたんだろ、そいつ」
青い顔で頷いた安部　由香里の肩を猫又が引き寄せる。
「そいつが狙ってるのはおまえだな、由香里ちゃん」
ファンシーなカフェに悲鳴が響く。　大泣きする安部　由香里をテーブルから必死で引っ剥がしておれは急いで店を出ることにする。
「三千七百五十円になります」
「げっ」
安部　由香里の分までおれの支払いかよっ。　貰ったばかりのお小遣いが一瞬で心もとない額に減って落ち込む。　それに追い打ちをかけるのが店を出る前に聞えた会話だ。
「ねえ、あの三人三角関係だったのかなあ」
「ほんとあのルックスで二股なんて信じられないよねぇ」
うるさいわいっ。
友人に呪われるわ、大金使わされるわ、おれにとっての、おれだって散々だっての。
おれのルックスに文句あんなら母ちゃんに言ってくれ。
「ひとまず帰る。夜中の一時に神社に集合。おやつは三百円までだっ」
「今すぐじゃないの？」
心細そうな安部　由香里が手を伸ばすが猫又はその手をぴしゃりと跳ね退ける。
「夜中にならんとやつは出てこんだろう。妖（あやかし）ちゅうもんは結構デリケートにできとる」
じゃあ、昼間っから出歩いてるおまえはどうなんだよと口の先ま

で出かかったがおれだって勉強している。　んなこと言えばどうなるのかは分かってる。
おやつは三百円までって、持って行っていいのか。

昼間はあんなに暑かったのに夜中ともなると気温がぐっと下がって肌寒いほどだ。
「上着着てくれば良かった」
「これくらいで根を上げるとはモヤシっ子だな、相変わらず」
だっておまえ尻尾首に巻いてるじゃん。
「一つ寄こせよ」
「何をだよ、『吟醸ニボシ』ならやらんぞ」
「いるか、そんなもん。って、おれが買ってきたんだよ、それ」
おれが欲しいのはそのあったかそうなもんだ。　思った時には手が伸びて猫又の首に絡んでいた尻尾の一つを掴んでいた。
「な、なにすんだ、コラァ」
「いや、寒いからさ」
自分の首に巻こうとしたけどおれの首までは届かない。　仕方ないので両手で揉み揉みしてたらいきなり猫又の蹴りがおれの尻に入った。
「痛えっ」
「ドアホ、何度も言わせるなよ。痛くしてんだよ、尻尾を放せ。わざとやってんじゃないだろうな」
――え？
「ったく気安く触んじゃないっ」

ぶうとふくれる猫又は心なしか顔が赤い。　なんで赤いのか判断に迷う。　チョー怒ってるとかだったら危険極まりないけど……。

振り上げる蹄

あ、悪い悪いと頭を掻いていると砂利道をざっざっと走る音が大きくなってくる。

「丘野君」

はあはあと肩で息をしながら安部　由香里が目の前に来た。　目が腫れているのはきっとあれから泣いていたのかもしれない。

それを見て、おれはまた嫌な気分になる。　自分だから。自分が呪われたのが怖くて泣いていた――そんなのもう見えなくていい。

今までの自分を後悔しているわけじゃないんだろうと思うと目の前で泣かれていることすら寒々しく感じた。

「俺さまは姿を隠してる。妖(あやかし)はおまえの気配を追ってここに来るはずだ」

「え？　一人なんて嫌よ。助けてくれるんじゃないの？」

必死の形相の安部　由香里の顔にあざやかに猫又の平手が決まった。　ああ、平手ってこんな音がするんだというくらい小気味のいい音が響く。

「いたあああぃ」

そりゃあ痛いだろう。　良い音していたからな。　猫又の暴力はまったく相手を選ばないらしい。　そういうところは清いほど平等だ。　きっと子どもにだって平気で張り飛ばすんだろう。

「助かりたくないんだったらそれでもいい。本気で助かりたいなら我慢の一つも見せんかいっ」

「わ、分かりましたっ」

仁王立ちした猫又が手を振りあげたのを見て慌てて安部　由香里は後ろに飛んだ。

「ちっ、物分りがいいな」

それを見て、面白くなさそうに猫又が振りあげていた手を下ろした。

おいおい、もう一発張るつもりまんまんだったのかよ……。　やっぱり猫又は暴力妖怪だ。
猫又は、地面に何かを棒で描きこむとそこに安部　由香里を入れた。
「人は臭いからな。じっとしてろよ、少しは隠れていられる。声を上げるな、術が解ける」
「え？　おれもそこに入れてくれるんじゃないの？」
「おまえはやつを釣る餌だ。そこにいろ」
「えええ～っ」
今から妖(あやかし)が来るんじゃないのか？　そんなとこにおれを置いとくのかよ。　言っとくがおれは何もできないぞ。　っていうか、怖いことなんかごめんなんだ。
だからお願い、そこに入れて。　必死のおれのお願い顔も猫又には通じない。　っていうか、そもそも猫又っておれのことどう思ってんだ？
猫又はペットじゃない……じゃ、なんだと聞かれても答えに困る。
口は悪いし、横暴だし、金かかるし……。
わがままばっかし言っておれのベッドを我が物顔で使ってる。
でも、学校から帰って来てじゃれつかれるとなんだかほっとするんだよな。　その日あったことの愚痴を最初の三分くらいは……聞いてくれる優しい？　ところもある。　三分以上になると「じゃかあしいっ」との声と共に猫パンチされるが。
考えてみるにおれは結構猫又が好きなんだと思う。　だから少ないお小遣いの中から猫のおやつ買っちゃうんだし。
だけど猫又はどうなのか？　おれのこと『都合の良い男』なんて思っているのかも。
おい、待て、おれ。
不倫相手に恨みごと言ってる女みたいな自分に気づいておれは頭を振った。　危ない、危ない。　早く彼女でも作って妖怪相手に友情を求めるなんて気を起さないようにしなきゃ。

どっぷり自分の世界に浸っていたおれは目の前に誰かがいるのにいきなり気づく。
「あんた、由香里ちゃんとどういう関係？」
彼氏が恋人の浮気相手を詰問するような台詞におれは驚く。　目の前の物体……もしかしてこれが安部　由香里の言っていたイケメンなのか？
「……うっそ」
おれの目の前にいるのは相撲取りかと思うようなデブの猪だった。
直立してる猪。　イケメンどころか、人型ですら無い。
つーか、どんな趣味なんだよ、安部　由香里。　マニアックすぎだ。
美形妖怪にうっかり惚れこんじゃったっていうから、どんなに妖しい魅力満載の男前だと思ったら、二足歩行するでかい豚、いや猪って……。
こんなんが好みなら『どういう関係』も何もあるわけない。　人間界で恋愛なんて安部　由香里はおそらく永久に無理だ。
「えっとさ、なんで今回は安部　由香里の髪を使ったわけ？」
おれの問いに豚……いや猪は「おまえ、林ってやつが頼んできた相手か」とおれのジーパンの尻ポケットにいきなり手を突っ込んできた。
「うわわわっ」
驚くおれの目の前に例の包みが現れた。　あれ、それは安部　由香里に返したはずなのに。
だから――ここに来た？　安部　由香里の髪の毛に導かれてここに。　そういうことか。だから餌？
「俺以外の男と仲良くするなんて俺は絶対許さない」
豚は……いや猪は拳ならぬ蹄を振りあげた。
はあ？
猪妖怪が言った意味が今一つ分からない。　何言ってるんだ、こいつ？

「おまえ、安部　由香里に危害を加えるつもり……なんだよな」
「違う、おしおきしてやるんだっ」
おしおき？　って何？　普通の生活の中で幼いこども以外で『おしおき』なる言葉が出てくることなどまずない。
エロ関係なら……いや、これは無し。
「えっとどういうこと？」
「由香里はおれに頼っておれにメロメロでいればいいんだ。他の男と馴れ馴れしくするなんて許さない」
一瞬、ここがどこだか分からなくなる。　おれは可愛い彼女が他の男と仲良く話してるんで妬けてるんだと愚痴られているのか？

犬も食わないなんとやら

「その男って仕事の依頼だったんじゃあないの？」
おまえが『由香里ちゃん』を繋いでおきたいためにし始めた仕事の。　だったら焼きもち妬いてんの、おかしいだろ。　お客じゃないか。
おれの言葉に豚、いや猪がぶぎゃああと雄叫びを上げた。
「な、なんだよ」
びびって後ろに下がるおれの手を猪の蹄が掴んだ。　いや、挟んだのか、これは。
「由香里が今日の依頼人は格好良かったって嬉しそうに言ったんだ」
ああ――林、罪なやつ。
今までの猪の話を総合すると、この猪は『丑の刻参り』しに来た安倍　由香里に一目ぼれして変な知恵つけて自分を売り込んだ。
そして、ラッキーなことに安倍　由香里はとんでもなくマニアな美的センスの持ち主だった。
ラブラブだったのに、依頼人の男の容姿を褒める彼女に嫉妬した豚、いや猪は嫉妬で彼女に『おしおき』することにした――ってことか。
ってことは犬も食わないっていう痴話げんかじゃないの？
今の話に一部なんかおかしいと思うことがあったが、どこだか分からない。　けど、もう関わらなくていいのではと思う。
痴話げんかなら、二人で解決しろ。
「イノ君」
その声に猪がはっと後ろを振り返った。声を出したことで術が解けたらしい。
「由香里ちゃん」
「イノ君、ごめん。あたしの一番はイノ君なのに」
走り寄って来た安倍　由香里と猪は抱き合う。

恐ろしく気色悪い光景だが、本人たちがよければいいんじゃないのか。　そう思っておれはどこかに隠れているらしい猫又を探した。
「おまえら、離れろ」
神社のありがたいご神木の上から猫又が飛び下りてくる。　当然スカートはまくれ上がってお馴染の花柄パンツも丸見えだ。
「猫又、いいじゃないか」
おれの言葉に猫又が吼えるように反論する。
「ドアホがっ。人間と妖怪の恋愛などあるわけがない」
その言葉になぜかおれは傷ついた。　現に今目の前で仲良く抱き合っている人間と妖怪がいるじゃないか。
「止めろ、本人同士がいいならいいじゃないか」
そう言ったおれの方に猫又がゆっくりと顔を向ける。
「バカか、おまえ。あれでいいと本気で思ってるのか、孝之」
「お、思ってるよ」
じゃあ聞くがと猫又は顎をしゃくった。
「おまえのダチの林はぶさいくなのか」
「い、いや。どっちかというと爽やかなスポーツマンって感じの男前かな」
「あ……」
そこで、さっきの猪の話でおかしいと思ったところがあったのをおれは思い出す。　林を格好良いと思う美的感覚を持っているのにこの猪を『イケメン』呼ばわりすることに違和感を覚えた――そうだったんだ。
「猫又、もしかして」
そうだとおれに頷いて見せた猫又が猪の後ろ脚に蹴りを入れる。
体に似合わずそこはあまりにも華奢であっけなく猪は地面に倒れた。
「正体を安倍　由香里に見せてやるんだな、豚野郎」
『解っ』
印を組んで殴りかかった猫又をやっと避けて転がる猪。　それに

容赦なく猫又が蹴りを入れる。
猪も反撃しようとするがあまりにも動きに差があるために猪は一方的に蹴られてる。
ブヒブヒ言いながらごろごろと転がりながら逃げる猪に構わず蹴りを入れる猫又。　一体どっちが悪者なのか分からなくなりそうだ。
頭を庇いながら安倍　由香里の方へ必死で猪は進んで行く。

妖怪と人間の間には

「由香里ちゃんっ」
「きゃああっ、化け物」
安倍　由香里が大声を上げておれにしがみついてきた。　その化け物とさっきまで良い感じだったことなんか、どこの妄想だと言いたいくらい、彼女の顔には恐怖と嫌悪感しか浮んでいない。
術が解けて彼女にもでかい猪の姿に見えるようになったんだろう。
だったら、これがまっとうな反応だとは思うのに、なんだかおれは猪が可哀そうで堪らない。
「由香里……」
「きゃああっ、来ないでよ。気色悪いっ。早くやっつけてよ、消してちょうだい」
安倍　由香里の言葉に猪はよろよろと後ろによろけた。
「あんた、自分の姿鏡で見たことあるの？　よくもあたしを騙したわね、許さないからっ」
「もう、止めろよ。自分ばっかし被害者面すんな」
言い募る彼女におれはもう腹が立って仕方ない。
そりゃ、猪はイケメンに成りすましたかもしれないけど。　ていよく使って良い思いをしたのはおまえじゃないか。
もうモテない男連盟でも作って署名活動したいくらいだ。　このまま見逃してやれよ。　そう思ったおれの横で猫又が肩をぐるりと回す。
「んじゃ、こいつは俺さまが消滅させてやる」
「な、何言ってるんだよ。悪いことしたかもしれないけど、あいつだって反省してるだろうし、何も殺すなんて……妖怪の仲間じゃないか」
「仲間だぁ？」
いきなり猫又が腹を押えて笑いだした。　最後には涙まで流して

いる。
「何がそんなに……」
「おかしいのかって？」
おれの言葉を勝手に引き取って猫又がおれの胸倉を掴んだ。
「妖怪にお友達なんてのはいないんだよ。俺さまにだってそんなやつはいない。俺さまは人間に害をなす妖怪を殺す。徳ってやつを積み立てて今度こそ成仏してやる。じゃまするなよ、孝之」
猫又に突き放されて、おれは唖然と立ちすくむ。
結構楽しく暮らしていたと思っていたのはおれだけだったのか。
猫又はおれのことなんか……。
「何泣いてんだよ」
「泣いてなんかねえよ。おまえなんか、ばんばん同胞を殺しまくってさっさと成仏しちまえっ。友達だと思ってたのはおれだけだったんだからな」
「おい、孝之」
「触んなっ、冷血妖怪」
掴まれた腕を振り払うと、猫又は唇を一文字にしておれを見ていた。　その隙に猪妖怪は四つん這いで逃げて行く。　驚くほどの早さだった。　やっぱり二足歩行は無理があった。　そりゃそうだろう、あいつは猪だ。
「殺さないのかよ、逃げてくぞ」
「うるさい」
猫又は一言言うと降りて来たご神木に飛び上がるとそのまま登って行く。
「女、終ったぞ」
「あ……うん。ありがとう」
猫又の声に安倍　由香里が思い出したように礼を言うと踵を返して駈け出して行く。　彼女にとっても思い出したくない事件だろう。
「終った……んだ」
一件落着――そのはずなのに、この寂寥感はなんなのだろう。

「帰らないのか、猫又」
見上げても猫又の姿は見えなかった。　このまま別れるつもりなんじゃないか。　なんとなくそう思う。　でも、そんなの嫌だ。
このまま喧嘩別れはもっと嫌なんだ。
「おまえがおれのこと、なんとも思ってなくていいから。極悪非道でもいいから。いつだって、おれのとこに帰って来いよ。猫又」
首を伸ばして必死で木々の間を探すが、どこにも猫又は見えず、返事も返って来なかった。　代わりにざわざわと冷たい風にあおられた木々が大きく音を立てる。
始まりも突然で、結局終わりも突然だった。
初めてあったのも真っ暗な夜で、結局さよならした今も夜。　相手は妖怪だったんだと改めて思う。　分かり合えない、そうなのか。『人間と妖怪の恋愛なんてありえるわけが無い』猫又はそう言ったけど、妖怪と人間の友情はどうなんだ？
おれは、おれはあると今でも思ってるよ、猫又。
気づかれないように二階の窓から家に帰る。　靴を先に窓から投げ込んで体を入れた。　ため息をついてベッドを見る。
そうだよ、いつもこんな感じでベッドを占領してるんだ猫又は……って。
「猫又？」
「へっくしゅんっ。早く窓を閉めろっ、寒いだろ」
そこにいたのは黒猫で。
そいつには尻尾が二本あった。
「猫又っ」
「なんだよ、一回言えば分かるだろ。夜中なんだぜ。大きな声を出すな。それとな」
猫又がぺろりと前足を舐める。
「ここにいるのは居心地がいいからだ。それにおまえは『視えるやつ』だ。これからも役に立つ……まあ嫌いってわけでもないしな」
「視える？」

「端からおまえにはあのイケメンの正体が視えていたろうが。そういうことだ」
――おれって視える人だったのか。
そして猫又はおれのこと嫌いじゃ無い。　それが分っただけでもいいじゃないか。
「ヘラヘラ笑うなっ、気味が悪い」
そう言って猫又は丸くなってしまったけど。
猫又が戻ってきた。

――そしてまた次の話へ。

終わり

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8608w/

猫又と俺　2

2011年9月24日03時13分発行